

ユニット型地域密着型特別養護老人ホームにおける介護と生活の考察 ～行動観察調査による空間利用と行為の分析から～

ユニット型, 地域密着型, 特別養護老人ホーム
介護, 生活, 行動観察調査

石井研究室

黒川 慎朔

後藤 岳

水野 綾香

1. 研究の背景と目的

高齢者介護施設では、平成 15 年度に居室は個室を原則とし、10 人程度のグループを空間と介護の単位として整備するユニット型が制度化された。平成 18 年度からは介護保険制度において「地域密着型サービス」が創設された。これは、市町村単位で整備計画をたてて整備するもので、これにより入居型の介護施設（特別養護老人ホーム）は、29 名以下の小規模な定員で計画・設置が可能となった。

これまで、ユニット型介護施設に関わる空間や生活・介護の調査研究は行われてきたが、地域密着型施設における空間と介護の研究は十分されておらず、空間整備のあり方も十分な知見がない。ユニット型ではあるものの、従来の施設と比べて小規模になることで、空間的にもコンパクトに計画されるケースが多く、そのなかでの介護や生活の実態は明らかになっていない。

本研究ではユニット型地域密着型特別老人ホームでの入居者及びスタッフの空間利用と生活行為、または介護行為の実態を調査することで、施設計画に資する知見を明らかにすることを目的とする。

2. 調査対象施設の概要

調査は秋田県秋田市にある、ユニット型地域密着型特別養護老人ホーム（延べ床面積 1,499 m²）にて実施した。同ホームは 3 ユニット（10 名 + 10 名 + 9 名）、入居者計 29 名、介護職員数は 19 名の施設である。2 階建てのコンパクトなつくりで、1 階には事務室と 1 ユニット（B）、地域開放のスペースとテナントショップ、2 階に 2 ユニット（A, C）というコンパクトな構成である。2 階のユニット間にはセミパブリックスペースが設けられている（図 1）。

各ユニットは中廊下型の平面構成で、10 名（9 名）の個室（トイレ付）とキッチン、リビング・ダイニング、共用のトイレと浴室（リフト付）からなる。各ユニット入り口には扉と玄関が設けられ、独立したつくりとなっている。

入居者は調査時点で 26 名（定員 29 名）で、A ユニットは 9 名（定員 10）で平均要介護度 4.2、B ユニットは 7 名（定員 9）で平均要介護度 3.7、C ユニットは 10 名（定員 10）で平均要介護度が 4.1 となっていた。

3. 調査の方法

調査は 2015 年 10 月 14 日から 16 日にかけて実施した（13 日に予備調査と準備）。主に 2 つの調査からなり 3 つのユニット全入居者の空間利用と生活行動の調査（調査 1）と、介護職員の空間利用と介護行為の調査（調査 2）である。

調査 1 は午前 7 時から午後 8 時までの計 13 時間にわたって、調査員が各ユニットに入り、全入居者の行動を 5 分ごとに平面図上に記録する行動観察調査による（記録総頻度 156）。今回はプライバシー上の配慮から、居室内や浴室を除く共用空間を対象とした。

調査 2 は C ユニットにおいて 2 日間行った。調査日に当該ユニットに勤務する介護職員の勤務体制にあわせて調査員を付け、マンツーマンで空間利用と介護行為の具体を 1 分ごとに記録をする手法をとった。初日は介護職員 4 名、2 日目は 3 名が調査の対象となった。なお、勤務体制は早番が 7 時 00 分～16 時 00 分、日勤が 10 時 00 分～19 時 00 分、遅番が 13 時 00 分～22 時 00 分となっている。

3. 結果と考察

3.1 入居者の空間利用と生活行為

3.1.1 ユニット別の空間利用と生活行為

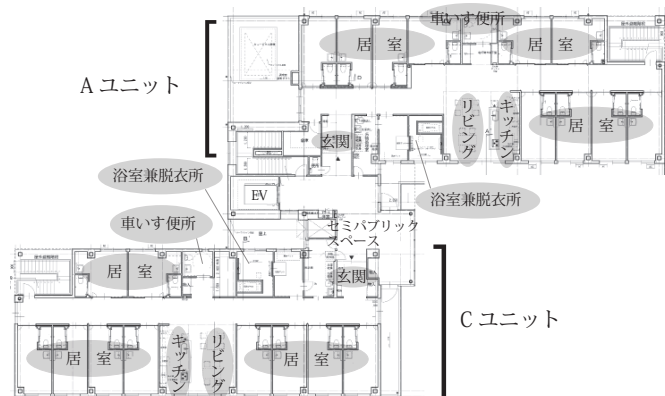


図 1. 調査対象施設の平面図（2 階）

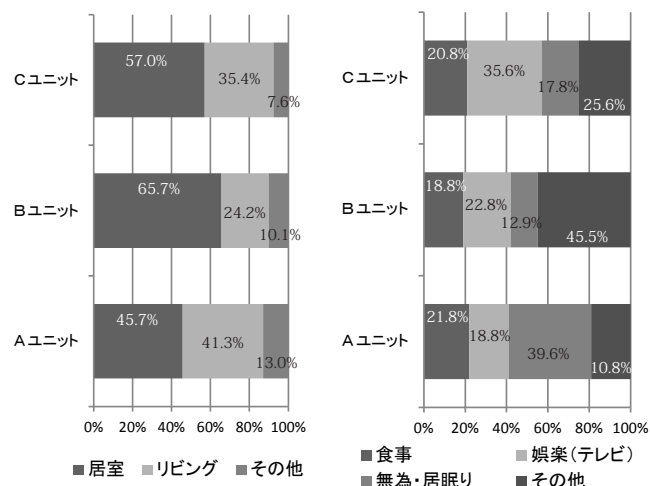


図 2. ユニット別の空間利用と生活行為

まず空間利用の状況を見る。施設空間を大きく8つのゾーンに分けて集計した。全てのユニットで居室の滞在が最も多い。Aユニットが45.7%、Bユニットが65.7%、Cユニットが57.0%となっている。いずれのユニットも次いで多いのがリビングで、Aユニットが41.3%、Bユニットが24.2%、Cユニットが35.4%となっている。居室とリビングの滞在でほぼ90%を占め、ユニット内で生活が完結していることがわかる(図2)。

Aユニットではリビングの割合が高いが、要介護度5(最重度)が10人中5人と最も多く、出来るだけスタッフの目の届くリビングに滞在させている結果と考えられる。

また、Aユニットでは「その他」の中で廊下の滞在が10.5%、Bユニットでは5.2%となっていたが、特にAユニットでは、経管食の入居者がいて、リビングそばの廊下に滞在していた結果である。Bユニットは平均要介護度が3.7と3ユニットの中で最も低く、車いすを使ってゆっくりと移動する人がいたためと考えられる。

続いて生活行為についてみる。行為はその内容に応じて8分類して整理した。食事の割合はAユニットが21.8%、Bユニットが18.8%、Cユニットが20.8%となっていた。Aユニットでは要介護度が高い人が多く「無為・居眠り」が39.6%、B・Cユニットでは「娯楽(テレビ)」が最も多くBユニット22.8%、Cユニット35.6%となっている。Bユニットの「その他」が多い理由は「移動」(10.9%)のほか「手伝い」が多かったためである(図2)。

3.1.2 個人別にみた空間利用と生活行為

入居者個々の状況を見るとさらに特徴がみてとれる。図3は、全入居者の滞在场所を居室、リビング、その他の3区分として居室滞在の割合の多い順に並べたものである。「その他」には廊下や共用便所、浴室などが含まれている。基本的にはいずれも居室とリビングで生活が行われているが、その傾向は個々で異なる。「その他」が多い入居者(A①など)の滞在はリビング脇の「廊下」である。

図4は図3での居室滞在割合の高い入居者順に居室以外での生活行為の状況をみたものである。個人によって大きなばらつきがみられる。

3.1.3 要介護度別の空間利用と生活行為

先にみた個々の特徴をさらに明確にするために要介護度別に分析した。要介護度が1～4の入居者と要介護度5の入居者とを分けて集計した結果が図5と図6である。

空間利用をみると要介護度1～4では居室滞在が59.1%で要介護度5では48.3%と約10%差がみられる。リビング滞在の傾向は反対に、要介護度5で10%ほど上回る結果となっている(図5)。要介護度5の入居者は、スタッフの目の届くリビングに滞在している割合が多いという傾向が明らかである。

生活行為についても傾向の相異がみられた。特に「無為・居眠り」が要介護度1～4では11.8%であるのに対し、要介護度5では46.6%と高い(図6)。リビングでの滞在は多いものの「娯楽(テレビ)」の割合が16.7%と要介護度1～

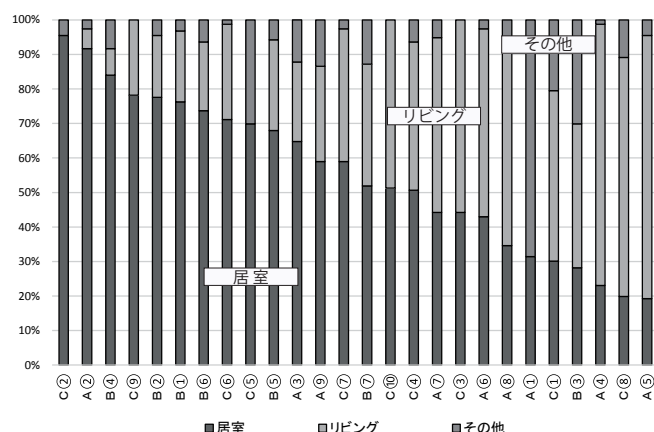


図3. 個人別にみた各空間の利用割合

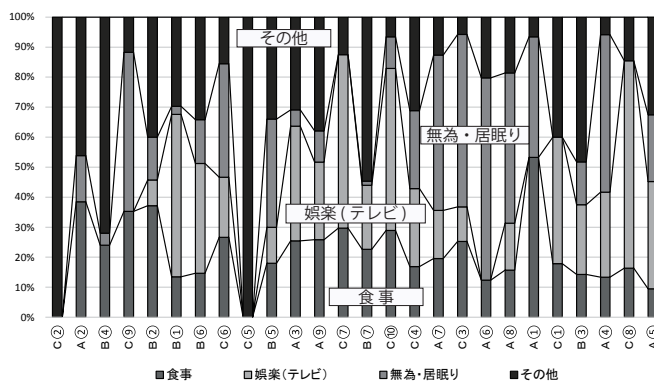


図4. 個人別にみた各生活行為の割合

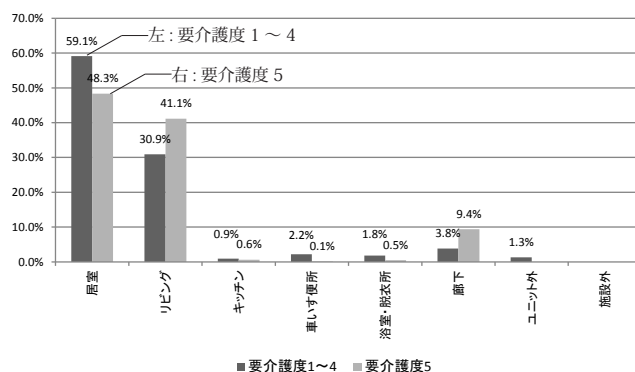


図5. 要介護度別にみた各空間の利用割合

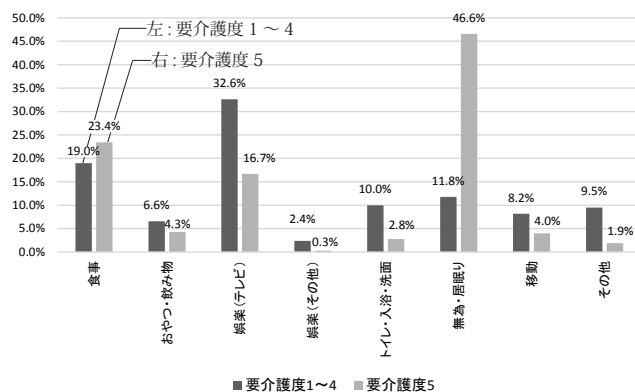


図6. 要介護度別にみた各生活行為の割合

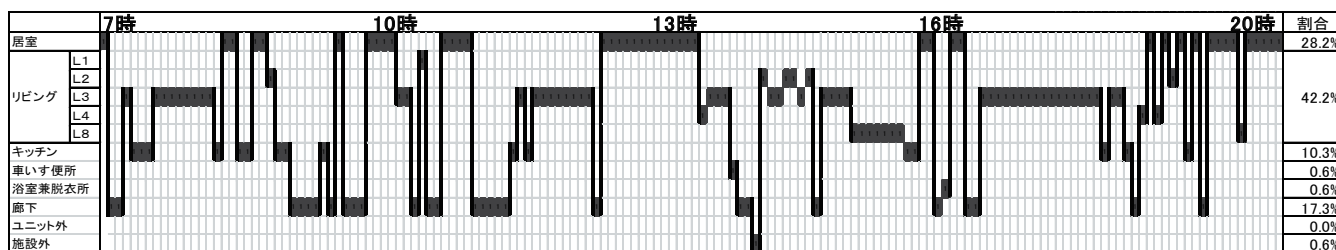


図 7. 入居者A1さん (Bユニット 要介護度3) の生活行動パターンと各空間利用割合

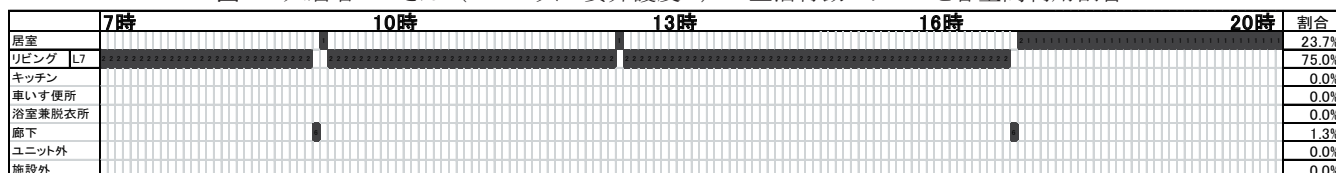


図 8. 入居者B5さん (Aユニット 要介護度5) の生活行動パターンと各空間利用割合

4の半分程度となっている。

さらに空間利用の割合が同様であっても異なる生活パターンがあることも確認した。図7と図8は特に居室滞在の割合がほぼ同様の入居者だが、移動のリズムや空間利用の様態が大きく異なることがわかる。これは入居者の要介護度等が影響している。

図7のA1さんは移動が自立していて、自発的に空間を移動しているが、図8のB5さんは移動介助が必要なため職員主導の滞在所選択と生活リズムになっている。空間利用割合だけでは見えてこない生活の形が明らかになった。

3.2. 介護職員の滞在空間と介護行為

3.2.1 時間別にみた滞在場所

続いて介護職員の空間利用（滞在）について分析する。調査両日の各時間帯別の滞在空間についてみたものが図9と図10である。10月15日の調査では職員1名に特異な滞在傾向があった（ケアマネージャーで直接介護に関わらなかった）ためその職員のデータを除いて集計している。

2日間のデータをみるとキッチンとリビングでの滞在が多くを占める傾向は同様であった。時間帯別では食事の準備や片付けが多くなる時間帯でキッチンでの滞在が多くなり、日中含めその他の時間はリビングでの滞在が多くなる傾向がみられた。リビング・キッチンを中心としたコンパクトなユニット空間構成であることも、リビング・キッチンでの滞在和居合いが高い要因である。居室滞在は15～20%となっている。

午後の「ユニット内その他」は主に「浴室」である。これには、昼食を終えた入居者の入浴介助があるためである。15日の16時に「リビング」での割合が特に高い理由として、この時間に「リビング」でカンファレンスが行われていたためである（図10）。

21時以降はほぼ入居者が各居室に戻り就寝するため、スタッフはその日の介護記録や整理整頓のため「リビング」や「キッチン」に滞在していた。

3.2.2 時間別にみた介護行為

介護職員の介護行為を分析した。図11では10月15日のケアマネージャーを除いた介護職員3人分のデータを、

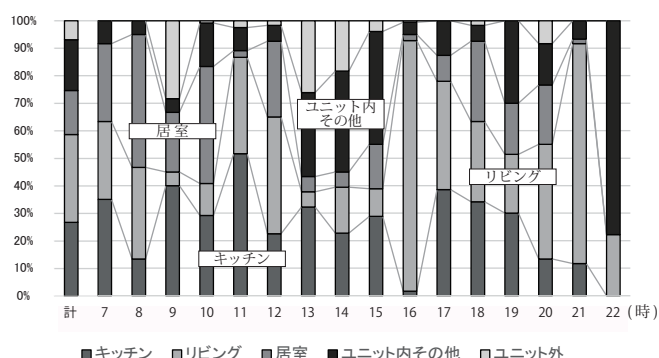


図 9. 10月15日の時間別にみた各空間の滞在割合

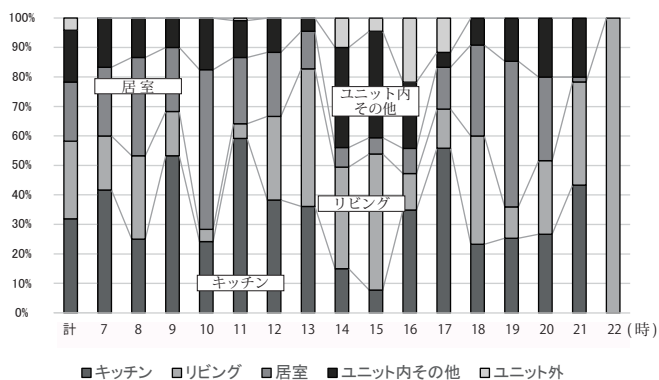


図 10. 10月16日の時間別にみた各空間の滞在割合

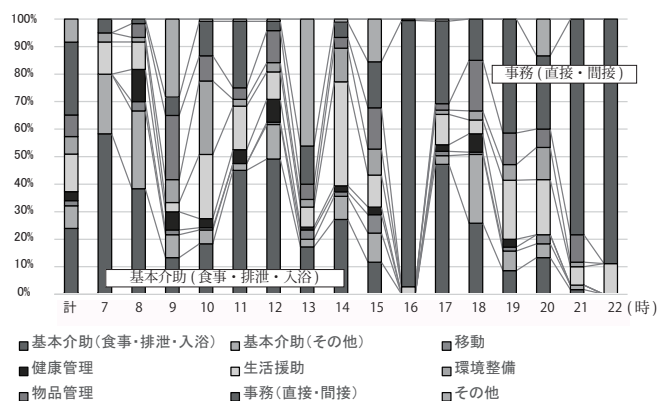


図 11. 10月15日の時間別にみた介護行為割合

図 10 では 10 月 16 日の勤務 3 人分のデータをあわせた結果を示す。いわゆる食事や排泄、入浴の介護となる「基本介護」は 15 日が 23.9%、16 日が 28.6%となっている。コンパクトな空間構成のため「移動」の割合は 2%前後と少なく、ムダのない動きができているとみることが出来る。

15 日の 16 時に「事務」の割合が特に大きい理由としては、記録作業など通常の事務作業に加え、カンファレンスが行われていたためである（図 11）。

時間帯別にみた介護行為の特徴もみられる。「生活援助」には入居者との会話や、行動の様子見などが含まれる。入居者と向き合って暮らしをともにすることが大きな目標のユニットケアでは、この「生活援助」の割合がどれだけとれるかが重要となるが、介護職員数や入居者の要介護度の状況によっても、変化してくる部分である。

3.2.3 勤務帯別の滞在场所

図 13 では職員の滞在场所を 3 つの勤務帯ごとに比較した。入居者の外出の有無などにより日による差はあるが、早番では「キッチン」が 20 ～ 35%、「リビング」は 30%程度、「ユニット内その他」が 10 数%程度となっている。

日勤職員では、昼食のほか間食などもあるため「キッチン」での滞在割合が高く 35 ～ 40%程度、「リビング」が 25 ～ 30%などである。遅番では、「ユニット内その他」が 27 ～ 35%と多い。

3.2.4 勤務帯別の介護行為

図 14 では職員の介護行為を 3 つの勤務帯ごとに比較した。特に遅番で両日の「事務」に差が出たが、これは 15 日にカンファレンスがあったためである。

いずれも「基本介護」は 25 ～ 30%程度、早番で「健康管理」が若干多く 4 ～ 5%程度、日勤では「物品管理」が他勤務帯よりも多く 10%程度となっておりおおむね勤務帯による傾向をみてとることができる。日勤帯に比べて早番、遅番は入居者の状況や入浴介助の状況、カンファレンスの状況によって変動する幅が大きいといえる。

4. まとめ

調査を通して入居者と介護職員の行動・行為と、それに伴う空間利用の様態が明らかになった。

入居者の空間利用は要介護度の影響もあり、個々で異なるものの、1 日の生活の中では居室やリビングでの滞在時間が長く、ユニット内で生活のほとんどが完結していることが分かった。ユニットを出たところに「セミパブリックスペース」や「パブリックスペース」も計画されているが、現時点では十分活用できていない。入居者の生活を支える職員数や入居者の要介護度の影響も大きいですが、ユニット内での介護や生活支援で手一杯で、なかなかユニットの外まで生活を展開させていくことが難しい現状が示されている。

一方でこの施設の特徴であるコンパクトな平面計画が「移動」の少ない落ち着いた生活や介護を支えている状況も明らかになった。リビングやキッチンを中心とした職員の滞在や介助につながっている。見守りや介助がしやすく、キッチ

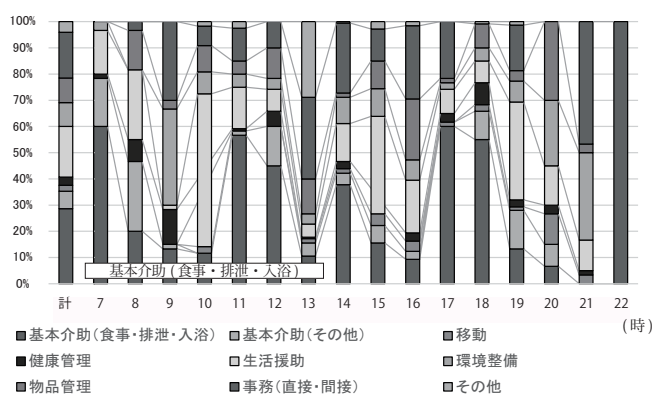


図 12. 10 月 16 日の時間帯別介護行為割合

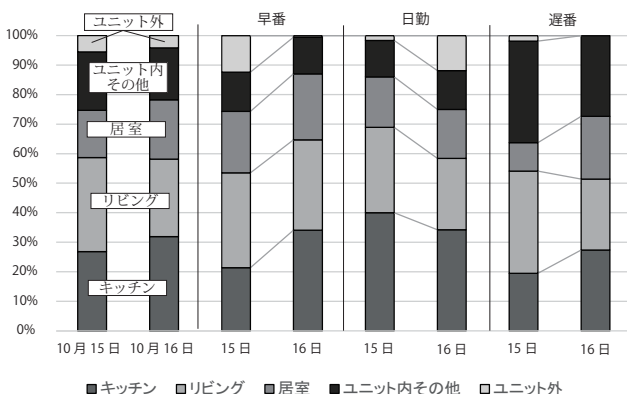


図 13. 勤務帯別のスタッフ滞在场所

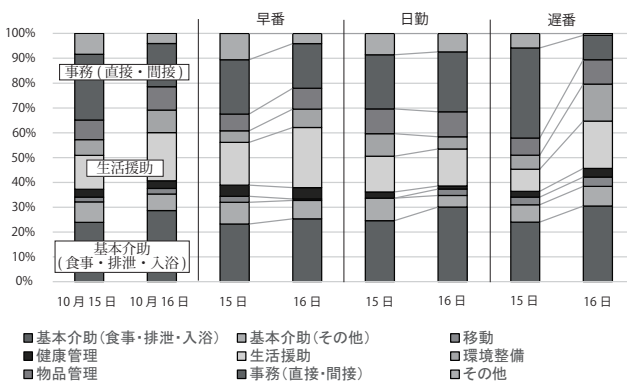


図 14. 勤務帯別の介護行為

ンやリビングで入居者への声かけや会話もしやすい上苦境が確認できた。

入居者も居室とリビングを中心とした安定した生活を送っているとも言えるが、居場所の選択肢が少なく、変化の少ない生活を送っているとも言える。同ホームは、敷地・面積上の制約もありコンパクトな平面構成としているが、空間内の壁面などに大胆な色を用いるなど、滞在する場所での心理的・視覚的な刺激を与えようとする意欲的なデザインも行っている。入居者や介護職員に空間利用や生活・介護の様態には現れてこない部分の価値や評価を行うためには今回のような調査では不十分であり、今後、さらに調査手法等の検討を行う必要もある。

謝辞： 調査にご協力くださいました特別養護老人ホームうぐいす城東の谷口施設長をはじめ職員の皆様、ライフデザイン建築研究所の茂木聡様にはこの場を借りて心から謝意を表します。